



TITLE:

佐波先生をしのんで

AUTHOR(S):

安間, 進

---

CITATION:

安間, 進. 佐波先生をしのんで. 経済論叢 1968, 101(5): 509-511

ISSUE DATE:

1968-05

URL:

<https://doi.org/10.14989/133265>

RIGHT:

# 經濟論叢

第101卷 第5号

---

## 哀 辞

故佐波宣平教授遺影および原稿

ミュール型紡績工場 .....	堀 江 英 一	1
部門間の連関構造 .....	山 田 浩 健 井 原 之 雄	23
原価管理思考としての変動予算概念 .....	野 村 秀 和	43
低開発国開発計画における技術選択 .....	名 畑 恒	64

## 記 事

佐波教授逝く

追悼講演（山田浩之 前田義信 谷山新良 森嶋通夫 上田三四二）

追 憶 談（葛城照三 安間進）

故佐波宣平教授自作年譜

---

昭和43年5月

京 都 大 学 經 済 学 会

## 佐波先生をしのんで

安 間 進

私達ゼミナール学生で、佐波先生をしのんで話しあったことを、私が代表で話させていただきます。

佐波先生のお人柄とか、先生に対する私達ゼミ生の印象はとても一言で言いきれるものではありません。しかし何よりも私達学生を非常に大事にして下さったということが強く思い出されます。いつか先生は「大学教授として大事なことは1つは学生を育てること、もう1つはこれが自分の業績だと言えるものをうちたてることだ。」と言われました。

この1つめの学生を大事にして下さったということでは、いろいろなことが思いださ

れます。4月のゼミナール開講の際に黒板に非常に詳しい地図をお書きになりながら、開ロ一番「私の家はここです。学生なら喜んで会いますから、どうぞいつでも来て下さい。」と言われ、私達は驚いたものでしたが、事実自宅におうかがいした時はいつでも会って下さいました。それは先生のご病気が悪化し面会謝絶になるまで続き、私達は先生とお話したり、芝生刈りやマキ割り、先生の散髪をさせていただいたりしました。先生がいつもあんなにボサボサの髪をされていたのは、もしかしたら私達の仲間が散髪させていただいたせいかもしれませんが、先生はそれがうれしかったのかもしれませんが。

又病気になられる以前は、学生の下宿を不意に訪れられ、先輩達は恐縮されたとのことでした。先生は学生の下宿を訪れることを非常に楽しみにされておられ、又ゼミの指導教授としての義務であると思われていたのですが、病気になられてからそれができないという、残念がられておりました。あんなにおきらいだった野球でも、私達のゼミ対抗野球大会準決勝の時にはステッキをついて応援に来られ、ゼミナール学生がまとまってプレイするのをうれしそうに見ておられた事からも、先生がどんなに学生との接触を大切にされていたかがわかるといえます。先生の奥様が「自分の息子より、ゼミナールの学生を大事にするんですよ。」と言って笑われた時、先生は目を細めて笑っておられました。

以上は先生が、私達ゼミ生をいかに大事にして下さったかということですが、次には学問や人生に対するきびしさを常に私達に示されたことです。

「私は家の都合で、学校に行けずに製図見習工をしていた時、勉強をやりたいという希望が強く、強くわいた。そして講師や助教授の時は勉強が好きで、好きでよく学校に泊りこんで勉強したものだ。」と言われたことがあります。その学問に対する激しい姿勢は変わらず、昨年11月まで身体の痛みをおして数理経済学の講義を続けられました。

先生はよく「ゼミナールの教科書は8回読んで下さい。」と私達に言われました。練習問題は先生だけは一題残らずやってこられました。教科書にのっている参考文献は全部読んでくる義務が、教師としてあるのだが、病気のため身体がいうことをきかず、それが思うようにできなくて皆さんにすまない。」と言われました。私達は先生の $\frac{1}{10}$ でも予習をやっていたのかどうか疑わしく、今は恥ずかしい思いで一杯です。先生は又まちがったことやごまかしがおきらいで、私達に強くいましめられました。書物の校正は徹底的にやられましたし、又ゼミの発表で私達がわからないところをごまかそうとすると、「私を散髪屋だと思って、散髪屋のおっさんにもわかるように、わかりやすく説明してみなさい。」と言われ、私達はずい分苦しめられたものでした。

最後にそういった学問や人生に対するきびしさとは対照的に、草木や身の廻りの物、他人に対する暖かさがあられたということです。私達が失敗したり、くじけたりした時

には、暖かいユーモアのある言葉で私達をはげまして下さいました。又服装はいつでも同じ古ぼけたのを着ておられ、ひげをそる一枚のかみそりの歯を10年近くも同じ物を使っておられたのは、洋服やかみそりに対する先生の愛情、先生のよく言われる「因縁」からだと思えます。一度「因縁」ができれば、それを最後まで大切になさるというのが、先生の信条でした。

以上学生を非常に大事にして下さったこと、学問や人生に対してきびしくあられたこと、しかしどんな物にも暖かく接せられたことという3つのことを述べてきましたが、もちろん先生にはこの他にもいろいろな面がおありになりましたし、私達にも数え切れない程の思い出があります。

先生の学問への情熱と、私達への愛情とに障壁となった病気を私達は強く憎みますが、先生がもう亡くなられてしまったんだとは、まだなかなか信じることができません。私達の25日の卒業式には、先生がステッキをついでヒョッコリ出て来られて、卒業祝いと言って先生の好きなお言葉、たとえば先程上田先生も言われたニーチェの言葉を私達に贈って下さるような気が、ふっとしてなりません。

「Hungernd, gewalttätig, einsam, gottlos (飢えながら、荒々しく、孤独に、神を知らず。)」

ありがとうございました。